



異分野共創型教育開発での大学教員の学びの過程 : 国際教育交流と多文化共修の視点で

村山, かなえ

(Citation)

大學教育研究, 33:117-134

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100495452>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495452>



異分野共創型教育開発での大学教員の学びの過程 ー国際教育交流と多文化共修の視点でー

A Process of Learning by a Faculty Member in Development of Co-Creative Education:
From a Perspective of International Education & Exchange and Intercultural Collaborative Learning

村山 かなえ（神戸大学 異分野共創型教育開発センター 特命講師）/ MURAYAMA, Kanae

要旨

本稿は、神戸大学で全学レベルの教育開発を国際教育交流と国際／多文化間共修¹の側面から異分野共創型で担当する教員である筆者が、自身の担当業務からどのような学びを得たかを質的な解明で試みた。具体的には、オートエスノグラフィーの考え方を援用し、働く人々の経験学習（松尾, 2011）をもとにしたリフレクションツールを用いて、筆者自身の現職についての省察を行った。本研究により、国際教育交流と国際／多文化間共修がもたらす日本の大学での教育開発の意義や、異分野共創型で行う教育開発に関する神戸大学の課題と今後の可能性を検討した。本研究の結果、研究対象としての筆者が現職での業務経験から得た学びを、省察により自身のことばで記述し描写することで、他大学から神戸大学へ着任した教員が、学内外で遭遇する差異にいかに向き合うかの様相が明らかになった。また、神戸大学の教員として適応する姿と自己への洞察の深化が、実際の経験をもとにした学習のありようとなって、一大学教員の学びの過程として表象できることがわかった。

1. はじめに：本研究の背景と経緯

2022年10月、筆者は神戸大学大学教育推進機構に同年4月に設置された異分野共創型教育開発センター²（以下、異分野センター）へ特命講師として着任した。主な担当業務

¹ 末松 (2019: iii) は国際共修を「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流 (meaningful interaction) を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験」であり、学習者が協働学習によって互いに交流し学び合う「意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動」と定義している。ただし、本学内での議論では、必ずしも「国際」だけに限った共修ではないという意見があり、より広義での共修を指すために神戸大学では「国際／多文化間共修」と表記する場合がある。

² 「特色ある異分野共創型教育プログラム」の開発を目指して、神戸大学内外の連携教育プログラムを開発・構築するための支援を行う組織。プログラムコーディネイト部門とプログラム開発部門から構成される。詳しくは、<https://www.edu.kobe-u.ac.jp/iphe-ibunya/about/>（最終アクセス：2024年11月28日）に記載。

は神戸大学の全学学生向けに正課・正課外で国内学生と国際学生（受入留学生）がともに学びあう国際／多文化間共修（以下、多文化共修）の学内での基盤整備である。筆者は神戸大学への着任以前に、日本の私立総合大学と国立大学で教員としての勤務経験があり、いずれも全学での学生の留学受入や海外派遣などを担当する国際教育交流部署の所属であった。しかし、神戸大学では全学の教学に関する部署である大学教育推進機構に設置された、教育開発を担う部署の所属となった。

異分野センターの主配置教員としては筆者が第一号であり、筆者が担当する全学対象の正課・正課外における多文化共修教育の学内基盤整備を行う業務は、神戸大学で筆者ただ一人である。新規部署の異分野センターで、新規の主配置教員のポストを務める身としては、神戸大学では未知となる新規の事業推進を行うと、神戸大学の慣例との間に常に立たされる自分がいる。神戸大学と他大学の何が違うのか、神戸大学の良さは何か、どうして「異分野共創型」なのか、神戸大学で「異分野共創型」な「教育開発」を行う意味や価値は何か、といった疑問が自分の頭の中に降って湧く日々を過ごす。やがて、自分は現職の業務遂行で何を学んでいるのかに興味を持つようになった。きっかけは、村山（2020）を執筆し、日本の大学で働く一人の教員として、自分自身の学びの過程を省察する大切さを思い出したことによる。そして、あくまで筆者の主観ではあるが、神戸大学は互いの部署が何をしているかが理解しづらく見えにくい。「神戸大学は各部局の自治が強い」といった声は学内で筆者が度々見聞きしたことがある。つまり、各部署と連携しなくても自分の部署は生きていけて困らないということなのか。もしそうならば、新規部署である異分野センターは、何をしているかが対外的にさらにわかりづらい組織になりがちではないか。したがって、筆者自身が何を見つめ、何に遭遇し、何に苦悩しながらも前進してきたかを、文字にして表す必要性を痛感するに至った。筆者の現職で何が起きているのかを見える形にしなければ、現在の神戸大学の状況、かつ個別具体事例が神戸大学の中で埋もれて見えないままとなる。本当にこのままで良いのだろうか。筆者は自問自答を続けることで、単純に筆者自身が神戸大学着任から現在に至るまで何を学んだのかを可視化したいと考えようになった。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、筆者が神戸大学に着任してから本稿執筆時点に至るまでの約2年の間に現職に従事することで何を学んだか、筆者の学びの過程をとらえることである。つまり、筆者自身の学びをオートエスノグラフィ的に大学教員の学びとして可視化することを目指している。なぜ筆者の学びの過程を可視化するのか、そして、可視化することにどのような価値があるのかを本稿で探究したいと筆者は考えた。

ただし、筆者が神戸大学の現職で何を学んだのかを、ただ可視化するだけでは、筆者の「自分語り」のみに陥ることになりかねない。「自分語り」のみを可視化することは、本研

究が目指すものではない。

では、本研究で筆者の現職での学びの過程を可視化することは、筆者のみではなく、読者にとってどのような意義があるのか。まずは、筆者のように他大学から神戸大学へ着任した新任教職員で、もしも神戸大学での業務遂行で課題を感じるとしたら、本稿が課題解決のための参考事例の一つになる可能性がある。また、日本の高等教育機関で国際教育交流や教育開発分野を担当する教職員や、筆者と同様に異なる分野の業務担当となった大学教職員のキャリア形成の事例を知ることができる。

では、筆者が研究対象となる本研究はいかにして始めるべきであるか。マラニー・レア（2022=2023: 46-51）は、北米の複数の大学での研究方法論の指導経験をもとに、研究を始める際の問いをどのように立てるべきかについて、「研究プロジェクトの最初期の段階で必要なのは、きわめて個人的な問いに答えること（下線は原文では太字）」であり、「問いによって人は否応なく、みずからを省みることになる」ことだと言う。そのためには、筆者自身で筆者の現職での学びを省察することから始めたい。ただし、本研究での省察は、大山（2018: i）が指摘するように、「省察は単に自分の記憶をなぞるだけでなく、自らの行為について深く熟考し、次の行動に活力を与えるものでなければならない」だけでなく、「自分自身を対象にして熟考するアプローチであり、専門性や個別性が高い大学教育において、非常に有用である」点に留意する必要がある。筆者の現職での学びを筆者自身が省察するには、筆者自身で筆者の自己を省察するアイデアに辿り着いた。

筆者の自己を見つめる方法の一つとして、本研究ではオートエスノグラフィーの考え方を援用することとした。アダムスほか（2015=2022: 1-2）は、オートエスノグラフィーを「私たちが、個人的で文化的な経験をどのように知り、名づけ、解釈するようになったのかを、芸術的・分析的に表現する方法である」とし、「自己と社会、特殊と一般、個人的と政治的といったものの交差を名づけ、問い質すため、深く注意深い自己省察——一般的に『再帰性（reflexivity）』と言われる——を用いる」ことがオートエスノグラフィーによる研究方法の一つであると論じている。沖潮（原田）（2019: 153-155）は、「その場面の行動や感情、思考、やりとりなどが読み手にありありと伝わるような丁寧な記述」により、書き手と読み手の対話を通して「双方の自己省察を引き起こさせ、自己変容させるきっかけ（下線は原文では太字）」がオートエスノグラフィーの優れた点であると言及する。したがって、筆者の現職での学びを通して見つめる筆者の自己を、神戸大学で紡がれたストーリーの一つとして本研究で提示することにより、筆者が自身の現職での学びを自分のためだけに知るのではなく、本稿の読者がそれぞれの現状において自身を捉え直すきっかけになり得るのではないかと考えるに至った。

加えて、本研究を通して、国際教育交流や多文化共修を実践し推進する大学教員の一人としての学びや視点への洞察を行えればと考えた。堀江（2017: 30）は、多文化共修の「学びには、海外留学の魅力や価値と同様、経験した人にしかわかりえない、言語化しにくい

側面が含まれる」ため、多文化共修の「意義と魅力を、大学教育に関わるあらゆるステイクホルダーに伝えていくこと」を多文化共修の課題の一つとして挙げている。末松(2017: 49)はカリキュラムを国際化するためには、「大学のみならず学内のあらゆる組織、教職員、学生が一丸となり、『異』の受容と『自』の再考を新たな価値創造へ発展させる意識改革に取り組むべき」と論じる。ひいては、「大学の国際化とは、教育・研究・社会貢献における大学の機能を向上させる方策のひとつである」(堀江, 2017: 4)ならば、神戸大学の多文化共修教育を推進するために異分野共創型で教育開発に携わる筆者の業務実践から得る学びの解明を本研究で試みることで、ささやかながらも神戸大学の教学改革の一助となることを目指すことができたと筆者は考えるようになった。

3. 研究方法

本研究は、筆者の神戸大学での現職における学びを筆者自身が省察をとおして表象化するため、村山ほか(2021)を参考に、松尾(2011)が働く人々の経験学習の文脈で提示する「経験キャリアシート」を用いて、筆者の現職を学期ごとに振り返り、オートエスノグラフィー的に筆者の現職での学びの過程の表象化を試みた。ここで、「オートエスノグラフィー」とした理由として、沖潮(原田)(2019:153)が説明するように、オートエスノグラフィーは「分析方法の一つという位置づけではない。したがって標準化された手続きというものもない」と言える。したがって、本研究では働く人の経験学習(松尾, 2011)の考えをもとに作成された「経験キャリアシート」を使って自身の現職での学びの省察を行うことにした。この「経験キャリアシート」は、「適切な『思い』と『つながり』を大切にし、『挑戦し、振り返り、楽しみながら』仕事をするとき、経験から多くのことを学ぶことができる(下線は原文では太字)」(松尾, 2011: 2)との考えから、松尾(2011)は企業に勤めるマネジャーなどを対象とした調査により、経営学や心理学の理論をもとに、「経験から学ぶ力のモデル」³を提案した(図1)。

³ 松尾(2021)は、Kolb(1984)の経験学習サイクルと松尾(2011)の「経験から学ぶ力のモデル」を掛け合わせて、「経験から学ぶ能力のモデル」を提起しており、「学習志向(思い)」と「成長支援ネットワーク(つながり)」を中心に「挑戦的仕事(ストレッチ)」「内省(リフレクション)」「仕事のやりがい(エンジョイメント)」が周囲に位置して促進されることで、Kolbの経験学習サイクルである「具体的経験」「内省的観察」「抽象的概念化」「積極的実験」が促進される構造で表されている。

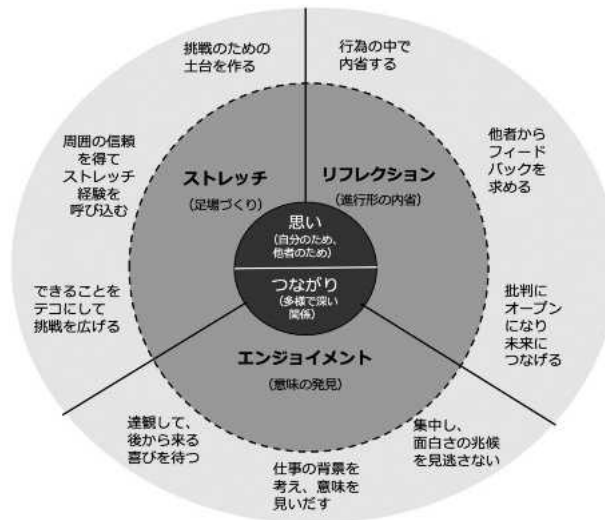


図1 「経験から学ぶ力のモデル」

出所：松尾（2011: 157）

「経験から学ぶ力のモデル」には、困難で挑戦を伴う仕事への準備のために足場を作る「ストレッチ」、「閉ざされた中で内省をするのではなく」（松尾, 2011: 156）前進するための内省を行う「リフレクション」、「やりがいや関心を持って仕事に臨み、達成感や成長感を味わう力」（松尾, 2011: 156）である「エンジョイメント」の3つの要素がある。それら3つの要素を促進させるために、仕事で大切にしている自分と他者の両方への「思い」と、他者との発達的な関係を育むための「つながり」の2つの姿勢が中央に位置する。この「経験から学ぶ力のモデル」を土台にして、自身のキャリアを長期的に振り返るための「経験キャリアシート」（松尾, 2011: 201）が省察のためのツールの一つとして紹介されている（図2）。

期間	経験学習		仕事の姿勢
	経験	学び	
キャリア 一定期間（年度・数年間など）	・ 期間中の全般的な仕事内容を振り返る ・ 自分を成長させてくれた経験を記入する ✓ ドラマティックな経験だけでなく、一見地味な経験も大切	・ どんな教訓を得たか	・ 「ストレッチ」 ・ 「リフレクション」 ・ 「エンジョイメント」 ・ 「思い」 ・ 「つながり」 の各観点から評価 ✓ 経験した時にどのような気持ちだったのかを思い出して記入する

図2 「経験キャリアシート」

出所：松尾（2011: 200-202）をもとに筆者作成

「経験」欄には、どのような経験をしたのか、極端な事例かどうかは関係なく自分の成長につながった経験を記入する。「経験」欄での出来事で自身が得た学びを「学び」欄に、「ストレッチ」「リフレクション」「エンジョイメント」「思い」「つながり」の観点で自身の気持ちを含めて「仕事の姿勢」欄にそれぞれ記入する。本研究では、年度と学期ごとに区切って、筆者の現職での特筆すべき「経験」、それらの経験から得た「学び」と「仕事の姿勢」を記入した。「仕事の姿勢」欄への記入時には、「経験から学ぶ力のモデル」(図1)の各項目ができているかどうかを確認するための「経験学習力チェックリスト」(松尾, 2011: 196)を参照した。また、「経験キャリアシート」(図2)への記入時には、筆者の業務報告文書(異分野センターでの自身の業務報告時に用いているもの)を自身の業務経験を思い出すための資料として参照した。

4. 研究結果

オートエスノグラフィーは、沖潮(原田)(2019: 153)が指摘するように「自叙伝的な部分とエスノグラフィー的な部分が重なり合っており、どれだけ読み手を揺さぶるような、豊かで分厚い経験の記述がなされたかが重要(下線は原文では太字)」である。したがって、本来であれば筆者が記入した「経験キャリアシート」(図2)の内容を全て本稿に掲載すべきである。しかし、紙幅の都合上、本研究結果で特徴的な記述内容のみを一部抜粋して掲載する。

4.1 第1期 神戸大学への着任(2022年度後期: 2022年10月-2023年3月)(表1)

神戸大学という自分にとっての新たな環境で新たな仕事を始めることになった筆者は、他者との協働により、「教職協働で作り上げることの楽しさ」を味わい(2022-後期-3)、他者から学ぶ環境に刺激を受けた(2022-後期-1)。一方で、神戸大学の全体の状況を把握できないことに度々遭遇したが(2022-後期-2)、上長や周囲へ相談して意見を求めることで業務遂行を続けるようにした(2022-後期-4)。

表1 「経験キャリアシート」第1期(2022年度後期: 2022年10月-2023年3月)

時期	経験学習		仕事の姿勢
	経験	学び	
2022- 後期 -1	新しい職場と仕事であるため、新鮮な気持ちで神戸大学へ着任した。国際共修事業チームのメン	他センターに所属する教員との協働が実践コミュニティのようで楽しく刺激があった。自分の発言	現職は、神戸大学へ着任するまでの仕事や自分の役割とは違うことを、自分に常に言い聞かせるよ

	バー（教員）との連携や、大学教育推進機構配置の他センター内に学内居室を設けていただいたため、他センターの様子を見聞きしながら、自分の神戸大学内での立ち位置を模索した。	に親身に耳を傾けてくださることが素直にうれしかった。	うにした。自分の現職で何が求められているのかが明確にイメージできない場合は、上長や担当事務局へ適宜質問や相談を行うことで、自分の現職への理解を深めた。
2022- 後期 -2	多文化共修のためのケース教材の試作版を制作することになった。ケースの執筆や教材の編集とともに、試作版制作プロジェクト全体の進行管理を任されることになった。	学部・大学院所属学生（国内学生6名）にケース教材試作版制作の補助業務を行ってもらった。神戸大学の学生たちのリアルな声を聞くことになり、学生目線による神戸大学の現状を垣間見ることができた。 ケース教材の試作版制作に自分の多くの業務時間を割いていたが、異分野センターの重点課題としての「国際共修事業」の主軸は何かが見えづらくなった。ケース教材の開発と神戸大学の多文化共修教育の拡充とがどのようにつながるのか、イメージを持つことが難しかった。	ケース教材の作成は自分が神戸大学へ着任するまでに決まっていたことであり、神戸大学全学へ向けた取り組みであるという理解のもと、試作版制作プロジェクトを遂行した。ただし、ケース教材を利用する対象の教員や学生が多岐に渡ることが徐々にわかるようになり、神戸大学の全学の教学に関して全景を描く困難さに直面した。ひいては、誰の何を対象とした多文化共修教育が神戸大学でどのように展開されているのかを把握する難しさに幾度となく遭遇することになった。
2022- 後期 -3	異分野センター開設記念のキックオフシンポジウムが、自分の神大着任の2ヶ月後に開催された。登壇者との調整などの準備や運営作業を、異分野センター執行部と担当事務局と一緒にいった。	キックオフシンポジウムの開催で、異分野センターの役割をようやく知ることができた。 教職協働で作り上げることの楽しさを味わうことができた。	日頃は自分の担当業務に専念していたが、異分野センターとしての今後の方向性や国際共修事業に求められることが何か、自分ができることは何かといった考えの整理が進んだ。木を見ながらも森も見る大切さを味わった。

2022- 後期 -4	神戸大学の全景が見えづらく、何を大切に国際共修事業を進めれば良いのか迷い、今後のイメージを持ちづらくなっていたため、自分から希望を申し出て、大学教育推進機構に所属するセンターの長2名と懇談した。	神戸大学のSWOT（S：強み、W：弱み、O：機会、T：脅威）が何かを垣間見て、神戸大学はどのような大学なのか、自分の認識との擦り合わせができた。2名の長は、考えを他者へお仕着せることなく意見を述べられる姿勢に感動した。自分も見習いたい姿勢だと思った。	神戸大学の強みは教職員どうしや学生と対話ができることであることを実感した。何事も中に入らないと見えない景色があることを感じ取る機会であった。自分が今後の業務遂行で迷うことがあれば、この時の懇談の内容に立ち返るようにしている。自分の現職での業務遂行のための指針の一つになると考えた機会となった。
----------------	---	---	--

4.2 第2期 正課科目の担当、過去・現在・未来の自分と向き合う（2023年度前期：2023年4月-2023年9月）（表2）

神戸大学の全学共通授業科目（教養科目）で新規に開講することになった多文化共修科目の主担当教員となった。神戸大学と他大学との教務の慣例の違いや、100名超規模のクラス運営に苦戦しながらも、他者との協働でできることを増やしていった（2023-前期-1）。また、筆者の担当業務の一環で実施した多文化共修FD（Faculty Development）企画により、神戸大学に着任するまでの他大学での自身の経験が生かせる方法を見出すことができ（2022-後期-3）、神戸大学への適応過程にいたることがわかった。

表2 「経験キャリアシート」第2期（2023年度前期：2023年4月-2023年9月）

時期	経験学習		仕事の姿勢
	経験	学び	
2023- 前期 -1	神戸大学の全学共通授業科目（教養科目）で新規開講の国際／多文化間共修型科目の主担当教員となる。予想に反して、受講学生が国際学生と国内学生を合わせて100名を超えた。	国内学生と日本語を使うことを希望する国際学生の多さに驚いた。他大学では日本語を使いたい国際学生がいなかった訳ではない。日本語運用能力の高い交換留学受入の国際学生が神戸大学は特に多いことを意識しながら	教育活動（科目担当や授業運営）は自分が慣れている部分が多いため、神戸大学での教務に関するルールや事務手続きが他大学とそんなに違うことが多いとは思っていなかった。しかし、新学期が始まると、他大学と勝

		ら、英語と日本語の使用比率をなるべく均等にして、やさしい日本語と日本語母語話者が使う日本語を織り交ぜて使うなど、教授言語の使用方法を工夫した。 副担当教員2名が、自分のメンターの役割となり、とても心強かった。TA1名（大学院・国際学生）・SA2名（学部・国内学生）との連携は、他大学での自分の教育実践と変わらずに神戸大学でも実施できることを実感できた。 今後、学内の他の教員が当該科目の主担当となった場合を想定しながら、自分以外の教員が担当しても科目運営ができる方法を常に意識した。	手が違うことが多く、教育活動に専念することが難しい時間が長く続いた。学生の反応や学習志向を授業中や提出物から把握したり、TA・SAと毎回の授業後に意見交換をしたことで、神戸大学全体の教育実践をある程度明確にイメージできるようになった。 100名超えのクラスであっても、多文化共修が実現できてしまうことを体得できた。正課科目で100名超えクラスを受け持ったことがなかったが、授業運営を受講学生全員やTA・SA、副担当教員と協力して行うようにしたら、100名超えでも授業が成立するようになった。新たな多文化共修の教育実践を経験できて、自分が教師としてできることが増えていく感覚を味わえた。
2023- 前期 -3	前年度に実施した多文化共修に関するFD企画での参加者アンケートの回答をもとに、自分の前職時代の学生と神戸大学の学生との対談形式による多文化共修に関するFD企画を実施した。	学内の事務手続きの煩雑さを再認識した。 登壇した学生たちが互いに刺激を受けた様子を目の当たりにしたことと、参加者アンケートの回答から、FD企画の実施に手応えを感じた。 グラフィックレコーディングを他大学所属教	FD企画実施はいくつもの作業が必要となり、労力を要した。しかし、自分の担当業務を前進させることができ、現職での自分の役目を一つの形にすることができたため、自分の今後の職務遂行への大きな励みになった。FD企画参加者だけでなく登

	員（自分の前任大学卒業後、神戸大学大学院修了）に依頼してFD企画を実施したことで、自分の前任大学と神戸大学での業務実践がつながって広がりを持つ感覚を味わった。また、学内外で連携を行う意義深さを改めて見つめることができた。 神戸大学で実現可能な教職協働の方法を会得できた。	壇者・企画運営者の過去・現在・未来をつなげることが、同時に自分の過去・現在・未来を一つのラインにつなげることになった。自分の過去が自分の未来を後押しすることになり、過去の自分に未来の自分が励まされることがうれしかった。
--	---	--

4.3 第3期 神戸大学の一員としての自覚の醸成（2023年度後期：2023年10月-2024年3月）（表3）

この時期は記入項目が最も多く、9つの出来事について記すことになった。神戸大学や異分野センターでの自分の立ち位置を深く見つめるようになり（2023-後期-3）、以前の勤務先大学でお世話になった教員を訪問したことで、神戸大学の外からの視点が持てただけでなく、大学教員として自分は何を大切にすべきかを再認識できた（2023-後期-5）時期となった。筆者自身の自己への気づきが刺激された（2023-後期-3、2023-後期-6、2023-後期-8）と同時に、神戸大学と他大学との違いの間に、もがくこともあった（2023-後期-4、2023-後期-7）。

表3 「経験キャリアシート」第3期（2023年度後期：2023年10月-2024年3月）

時期	経験学習		仕事の姿勢
	経験	学び	
2023-後期-3	異分野センターに2023年度前期に着任されたUEAと各自の業務状況を毎月共有することで、神戸大学での異分野センターの役割や立ち位置への自分の理解を整理した。	異分野センターに主配置の教員と言っても、UEAとの業務内容、役割、視座の違いを認識する。	「異分野共創型」という語句が付いた部署に所属する教員として、他者理解と自己理解に努めた。しかし、日頃の担当業務の領域が違っていると、共通言語を確立することや共通理解を持つことは、自分が

			思う以上に時間がかかる ということを痛切に思う ようになった。
2023- 後期 -4	自分の前任大学へ非常勤 で出講を開始した。前職 時代に自分が正課科目の 担当をしなかった英語学 位の学部へ出講すること になり、新鮮な気持ちで 毎週の授業を行った。	履修学生たちの授業への 期待の高さと、自分の教 授スタイルとの差異に困 惑した。自分の教育実践 の質の向上のために、何 をしなければならないか という現実と常に向き 合った。	特定の学問分野の概論を 英語学位の学部所属学生 へ教えるために、その学 問分野について勉強する ことはもちろんのこと、 自分自身の教育実践をシ ビアに見つめる習慣を持 つ必要があった。
2023- 後期 -5	以前に自分が勤務してい た大学で大変お世話に なった教員より日本の大 学国際化に関するご助言 をいただくため、先方へ 直接訪問をして懇談を実 施した。	自分の唐突な依頼にもか かわらず、懇談の実施を ご快諾いただき、大変丁 寧な資料と貴重なご助言 をいただいた。この機会 を決して無駄にはしてい けないと強く心に刻んだ。 また、過去の自分と今の自 分がつながる不思議な感 覚を覚えた。何事も無駄 ではないことを痛感した。	神戸大学の中だけを見る のではなく、学外から神 戸大学を見つめる視点を いただいた。何事もまず は学生の視点に立つこと、 学生や教職員と常にしっ かりと向き合うことが、 長期的に見ていかに大切 であるかを痛切に感じた。
2023- 後期 -6	上長の方々の呼びかけで、 大学教育推進機構所属の UEA や特命教員との懇談 会「教養共創セミナー」 が開催されるようになった。 同じ機構の別センター の教員との交流が促進さ れた。	同じ機構内であっても、 自分は他の教員と「大学 教員」としての認識に違 いが多いことを痛感した。 しかし、複数の学問領域 や教育分野を経験しての キャリア構築を皆が経験 している点は、自分も含 めて神戸大学の現職へと つながっているように理 解した。学術的な探究を 議論することができるコ ミュニティに自分の身を 置くことで、実践者とし ての自分が研究活動に向	それぞれの先生方のご専 門やご研究内容、業務の 様子をお聞きして、自分 にとって刺激になったの は間違いない。まさに「異 分野共創型」で学内を動 かしていくには、自分一 人ではなく、上長や他の 教職員と共に進めていく べきであることを、身を持 って教わることになった。

		き合う大切さに気づかせていただける大切な機会となった。	
2023- 後期 -7	神戸大学の正課外での多文化共修教育の基盤作りのため、国際学生への修学・生活支援を行う学生グループとともに、ワークショップを企画・実施した。	他大学での自分の実践をもとに企画したワークショップだった。運営に携わった学生たちだけでなく、ワークショップに参加した学生全員の満足度は総じて高かった。一方、正課外の学生活動に対する学内の認識が、他大学で自分が経験したものと違うことが徐々にわかった。正課外での学生たちとの協働は、かなり体系化して実施しないと意味を成さなくなってしまうことを、ワークショップ実施後に気づいた。	神戸大学に着任してから、自分のイメージや認識と実際は違うことが度々起こっていたが、正課外の学生活動についても同じように他大学との違いに随所に気づいた。正課よりも正課外のほうが取り組める範囲が広げられると考えていただけに、自分の前に大きな壁があることを感じずにはいられなかった。
2023- 後期 -8	外部資金への申請のための学内 WG と作業部会への加入が 2023 年度末に唐突に決まった。	どのような仕事を行えば良いか、自分がどのような行動を起こせば良いのかを状況を見極めながら理解しなければならず、自分の役割の不透明さに困惑した。 学内 WG に関して、自分の周囲の学内教職員からの声と自分自身の考えや認識に差異があり、ギャップに悩んだ。しかし、上長へ都度相談をしながら、目の前のことに集中するよう自分に言い聞かせて、自分ができる最大限のことを行うことに終始努めた。	他に適任者がいることだと思っていたので、自分が選ばれた時には、とても動揺した。会合に出席し続けることで、自分が何事にも動じず、冷静かつ柔軟に対応できる能力の向上を試される機会であるといった気構えを持てるようになった。上長の方々より、この業務は最優先にするように業務命令があったため、神戸大学の未来のために、自分ができる限りのことを行うようにした。

4.4 第4期 挑戦と葛藤（2024年度前期：2024年4月～2024年9月）（表4）

前年度に新規開講した正課科目の主担当2年目となり、何をどうすれば良いかが理解できるようになった（2024-前期-1）。これまでの担当業務での実績を複数の学会の年次大会で発表したことにより、神戸大学での自分の業務が一定の成果を得られたことを実感し、実践だけに留まらず研究のアプローチとなる視点を併せ持つ重要性を学ぶことができた（2024-前期-3）。一方、学内事情に翻弄されることが続き（2024-前期-2、2024-前期-5）、業務を遂行し前進してはいるものの、現職で自分ができることは何かに痛切に向き合わざるを得なくなり、葛藤を抱えるようになった。

表4 「経験キャリアシート」第4期（2024年度前期：2024年4月～2024年9月）

時期	経験学習		仕事の姿勢
	経験	学び	
2024-前期-1	多文化共修型科目の主担当教員を継続し、担当2年目に突入した。昨年度（2023年度）に引き続き、前期開講は受講学生が100名超えとなった。	昨年度と同様にTA・SAとの連携が実施できた。授業運営だけでなく、自分自身の教育実践の改善には、TA・SAの存在は不可欠であることに改めて気づいた。	他者との対話を通じて学びを深める傾向があることを自覚していたため、人員が変わったとしても、授業後のTA・SAとの振り返り会は、自分の教育活動の改善にとって欠かせない重要な要素の一つであることを再認識できた。
2024-前期-2	初年度（2022年度）から実施している学内部局訪問で、初めて研究科へ訪問した。	全学の部署が学内部局へ訪問するとなると、全学部署からの依頼を受諾できるかどうかを議論すると捉えられてしまうことに気づいた。他大学で自分が行った部局訪問と同じ方法を神戸大学で実施すると、訪問先部局の理解が得られにくい事態に陥ることを痛感した。	学部・研究科は自前で完結できることがあるため、自分たちが全学で何に成果を挙げているかという話は、かえって理解を得られにくいことがあり得ると感じた。また、「国際」「多文化」といった文言が並ぶと、何か特殊なイメージを持たれてしまうような反応があることを、学内部局訪問実施を調整することで自分が感じ取った。
2024-前期-3	これまでの国際共修事業の実績を学外へ発信する	神戸大学での多文化共修教育に関する実践のモデ	自分がこれまで神戸大学で取り組んだ教育実践を、

	ため、複数の学会年次大会で口頭発表を行った。	ル提示ができたことと、他大学教職員より自分たちの発表内容へ高評価をいただいたことで、神戸大学で国際共修事業を担当したことで一定の成果に到達できたことを実感できた。	学術的な視点で客観的にとらえて分析・発表して大会参加者との意見交換を行うことで、深呼吸をして自分の心身が少し軽くなった感覚を味わった。理論と実践の往還を自分の現職で行うには、実践から理論への引き上げと、実践と理論との循環が不可欠であることを身を持って味わった。
2024- 前期 -5	来年度（2025 年度）開講科目担当を協議した。開発支援の区切りとして、当初の計画どおり、現在自分が担当している多文化共修型科目の主担当教員を、大学教育推進機構の他センター教員へ変更するよう調整をしていたが、自分の主張とは別の結論になった。結果として、来年度も継続して自分が主担当を行う方向で調整することになった。	自分が開発支援に関わった新規開講の多文化共修型科目での実績を、大学教育推進機構として非常に高く評価していただいていることに、大変ありがた気持ちになった。しかし、自分たちのこれまでの取り組みへの非常に高い評価が、結果として自分たちの予想しない方向へと議論が進んでしまふことがあることを猛烈に自覚することになった。そのため、同機構内で異分野センターの役割や存在を理解していただく適切な方法は何かと自問自答することになった。	異分野センターの役割は教育開発であり、教育活動のための学内外の基盤づくりと実装化のサポートや提案である。神戸大学からの自分の現職への高い期待には、心からの感謝の気持ちを持って全身全霊で応えたい。その一方で、異分野センターの新規性や特殊性の価値を、主配置教員の一人として自分が学内外へ伝え続けなければならないことを、痛烈に感じる出来事になった。自分の正直な気持ちを上長に相談し、自分の内省をベースにした異分野センターに関しての発信について、具体的な方法を検討し実行することにした。

4.5 第5期 神戸大学と自分の今後に向けて(2024年度後期:2024年10月-本稿執筆時点:2024年11月) (表5)

前学期で抱えた葛藤を担当業務などへ昇華させるべく、自分の気持ちの切り換えを行っ

たことで新たな視点が得られ（2024- 後期 -1）、本研究に取り組むことで自分の考えを形にする醍醐味を味わえた（2024- 後期 -2）。

表5 「経験キャリアシート」第5期（2024年度後期：2024年10月-本稿執筆時点：2024年11月）

時期	経験学習		仕事の姿勢
	経験	学び	
2024- 後期 -1	多文化共修型科目の担当教員を継続した。昨年度（2023 年度）の同学期と開講時限を変更したことで、受講学生が昨年度の2 倍となった。	来年度（2025 年度）から、副担当教員を変更することになり、来年度の副担当教員1 名が各回の授業を見学された。新たな視点が入ることで、自分の授業実践を意識的に改良するようになった。	次年度に向けた動きを開始したことで、自分の気持ちに折り合いをつけながら、次に自分ができることへと意識を切り換えるようにした。来年度の副担当教員に自分の授業を見学していただくことで、各回の授業でどのような意味を持って授業内容を構成しているかを、より精度を上げて説明できるようにした。その作業が、授業内の受講学生への自分の言葉かけや、自分の授業運営への姿勢を少しずつ改善することにつながった。
2024- 後期 -2	次期学長が現職学長に決まり、異分野センターの拡充の可能性が非常に濃厚となった。	神戸大学の組織の一員として、今後の神戸大学へ向けて自分に何ができるかを考えた時、神戸大学でのこれまでの自分の業務で得られた学びを表象化する必要性を痛感した。そのため、神戸大学に着任してからの自分の学びのありようを、大学教育推進機構の紀要へ投稿することにした。	自分のこれまでの研究活動の課題の一つである実践から理論化への引き上げと、実践と理論との往還を、文字にして形に残るようにするには、自分の中で大きな葛藤があり、新たな挑戦となった。ある程度包み隠さずに自分の意見を述べることは、多少の躊躇があるものの、自分の仕事や大学教員としての新たな学びの段階

			へと移行できると思うと、自分の中で前に向かうためのエネルギーが湧き上がってきた。「取り組まなければ」という義務感を背負うのではなく、未来の自分が「あの時に取り組んでおいてよかった」と過去の自分に後押しされる姿を思い描いて、自分を奮い立たせるようにした。
--	--	--	--

5. さいごに：本研究の意義として

本研究は、筆者が神戸大学に着任してから本稿執筆時点に至るまでの約2年の間に現職に従事することで何を学んだか、筆者の学びの過程をとらえるために、オートエスノグラフィー的に大学教員の学びとして可視化することを目指した。そうすることにより、なぜ筆者の学びの過程を可視化するのか、そして、可視化することにどのような価値があるのかを本稿で探究したいと筆者は考えた。

本研究の結果、研究対象としての筆者が現職での業務経験から得た学びを、省察により自身のことばで記述し描写することで、他大学から神戸大学へ着任した教員が、学内外で遭遇する差異にいかに向き合うかの様相が明らかになった。そして、実際の経験をもとにした学習のありようとなって、一大学教員の学びの過程として表象できることがわかった。また、筆者が記入した「経験キャリアシート」(松尾, 2011: 201)の「仕事の姿勢」欄には、「経験から学ぶ力のモデル」(図1)で示される「ストレッチ」「リフレクション」「エンジョイメント」「思い」「つながり」の観点が全般的に網羅された記述であったことが特徴として挙げられる。

ただし、本研究での筆者の省察が「自分語り」に留まってしまわないようにする必要があるにあった。そのため、オートエスノグラフィーの考え方を援用し、筆者の自己を見つめながら、自身の学びの過程を可視化する理由と価値を考察することを本研究の目的とした。オートエスノグラフィーは、アダムスほか(2015=2022: 1-2)が言及するように、自己と社会との関係を熟考する「再帰性(reflexivity)」を含み、「社会的な正義を追求し、より良い人生の実現のために努める」ことへとつなげる研究方法である。また、オートエスノグラフィーは、沖潮(原田)(2019: 153-155)が論じるように、書き手と読み手の対話を通して「双方の自己省察を引き起こさせ、自己変容させるきっかけ(下線は原文では

太字)」になると言える。そのため、筆者の現職での学びを通して見つめる筆者の自己を、神戸大学で実際に育まれたストーリーの一つとして本稿で提示した。しかし、「自分語り」のように筆者が自身の現職での学びを自分だけが知るために本研究を行ったのではない。筆者の省察による学びの過程の表出を本稿で提示することにより、本稿の読者がそれぞれの立場と現状において自身を捉え直す可能性を含むことが本研究の意義である。そして、読者の自己変容へとつながり得ることが、本研究の大きな価値の一つである。

また、本研究により、業務での経験をもとにした学習者としての教員の存在と学習過程を示すことができたことは、末松（2017: 49）が言及する『『異』の受容と『自』の再考を新たな価値創造へ発展させる意識改革』となるための一歩である。堀江（2017:30）が論じるような多文化共修の「意義と魅力を、大学教育に関わるあらゆるステイクホルダーに伝えていくこと」が課題の一つであるならば、多文化共修での学生の学びはもちろんのこと、本研究のような教員の学びの一例も同じく「あらゆるステイクホルダーに伝えていく」価値が存分にある。そして、本研究で得られた結果を本稿により神戸大学内外へ伝えることが、神戸大学が提示できる多文化共修の意義や魅力の一つと言えるのではないだろうか。

オートエスノグラフィーの考えをもとに、筆者自らの言葉で紡ぎ出した自身の業務経験への省察は自己開示となるため、本稿執筆には多少の勇気が必要だった。筆者が抱える問題意識の連鎖がなければ本稿を執筆できなかった。筆者が神戸大学に着任してから直接見聞きした学内教職員の多様な気持ちの揺れ動きに呼応するように、正直なところ悩みながらも本研究を行い、本稿を執筆した。本稿が堀江（2017）や末松（2017）が言う多文化共修の意義の表れとなることを切に願う。

謝辞

筆者所属センター長である寺内直子教授には、実務から研究への視点を持つための心構えを含めて本稿執筆へのご助言と励ましをいただきました。深く感謝申し上げます。

参考文献

- アダムス・E・トニー、ジョーンズ・ホルマン・ステイシー、エリス・キャロリン、松澤和正・佐藤美保訳（2022）『オートエスノグラフィー：質的研究を再考し、表現するための実践ガイド』新曜社（Adams, T. E., Jones, S. H. & Ellis, C. (2015). *Autoethnography: Understanding Qualitative Research*, Oxford University Press.）
- 堀江未来（2017）「多文化間共修とは：背景・理念・理論的枠組みの考察」坂本利子・堀江未来・米澤由香子編著『多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社、pp. 1-33.
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential learning: Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

- マラニー・S・トーマス、レア・クリストファー、安原和見訳 (2023) 『リサーチのはじめかた：「きみの問い」を見つけ、育て、伝える方法』筑摩書房 (Mullaney, T. S. & Rea, C. (2022). *Where Research Begins: Choosing a Research Project that Matters to You (and the World)*, The University of Chicago Press.)
- 松尾睦 (2011) 『職場が生きる人が育つ「経験学習」入門』ダイヤモンド社
- 松尾睦 (2021) 「経験から学ぶ能力と職場学習」北海道大学大学院経済学研究院『経済学研究』第 71 巻 2 号、pp. 1-51.
- 村山かなえ (2020) 「国際教育交流における学びのコミュニティと場作り：大学教員の役割と求められる技量とは」立命館大学国際言語文化研究所『立命館言語文化研究』第 31 巻 第 3 号、pp. 61-72.
- 村山かなえ、加藤薫、三鼓悠太 (2021) 「グローバルコモンズにおける教職員の関わりと学びの在り方：学生どうしをつなぐ学びの実践が多文化理解コミュニティを構築するまで」第 27 回 大学教育研究フォーラム（オンライン：Zoom）個人研究口頭発表資料、2021 年 3 月 17 日
- 沖潮 (原田) 満里子 (2019) 「自己エスノグラフィー」サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング：特徴をつかみ、活用するために』新曜社、pp. 151-158.
- 大山牧子 (2018) 『大学教育における教員の省察：持続可能な教授活動改善の理論と実践』ナカニシヤ出版
- 末松和子 (2017) 「「内なる国際化」でグローバル人材を育てる：国際共修を通じたカリキュラムの国際化」東北大学高度教養教育・学生支援機構『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第 3 号、pp. 41-51.
- 末松和子 (2019) 「はじめに」末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編著『国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂、pp. i-vi.